The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	創刊のことば
Author(s)	前田, 嘉明
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1975, 1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11299
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

創刊のことば

科学，技術の驚異的発展にともなって，人間社会はかつてなかった速度で変貌を遂げつつある。科学的知識や技術が直接的に適用される事象はいうまでもなく，現代に生きる人間の行動型や意識構造までもが予測の範囲を越えた急激な変化から免がれることはできない。このような現実から提起される人間，社会に関する今日的な諸問題に対応し，人間のしあわせへの道標をうち立てることが私たちに課せられた課題である。現代という歴史構造の中から発生する問題は，当然のことながら，人間生活のもろもろの領域に相互に重複し，関連しあっていて，現象型としては単純にみえても，発生型はこの上なく多要因的である。こうした複雑な問題の解明に迫るために学際的研究の必要性が強く叫ばれている。

たしかに，現実に対する解析と屈折をことにする学的思考の協力は，問題考察の視野をひろびろと展開させる点からも，また分析の次元と単位の固定化をさける上からみても意義深いものにちがいない。しかし，学問研究にあっては，新たな認識領域を拓き，ひとつの準拠系を確立したとき，それを不当に一般化する，という危険がつねに存していることからいうならば，学際的研究にはこの一般化が拡大再生産されるおそれをなしとしない。私たちが直面し，解決をせまられている今日の問題の多くは人類的関心をあつめているもので，その解決に私たちが近ずきえない理由は，ただ学問が未熟だからではなく，また学際的研究がなおざりにされてきたというだけでもない。その理由は学問それ自体のありかたに一層大きく基因している，とはいえないであろうか。

学問，とりわけ経験科学は，経験性の濃度が高まるほど＜何のため＞の学問か，ということに対する感覚をにぶらすものである。もし，経験科学が，数量化しえないものは科学的研究と無縁である，＜何のため＞の問いは科学と哲学とを混同するものである，というような暗黙の前提の自明性に埋没しているなら，＜知は力なり＞にともなうべき責任がうとんじられ，人間の悟性が可能にするもののすべてが必ずしも理性的ではない，という自覚がもたれないとしても驚くにはあたらない。科学は，その主張するところは間違っていないが，沈黙をまもるところにおいては正当性を欠いている，という批判を科学自らがどう受けとめるか

によって，例えば，アポロ11号の月面着陸を人間理性の勝利とみるか敗北の現実逃避とみなすかが決まってくる。勝利とみなすとき，現代の科学は人間を自然の暴威から防る知識と技術は豊かに提供しえても，人間を人間の破壊行為からふせぐことに関しては全く無力である，という現実の重みは人間の何が，どのように支えるというのであろうか。

学問が思考の単なる体系的浪費でないとするなら，今日の哲学は現実の諸条件から孤絶することはゆるされない。同時に経験科学もまた哲学的分析に俟つ価値ずけや実存的決断などの問題に無依存的であってはならないであろう。

人間科学部が経験科学の批判者としてある種の非経験的学問を自らの体系におさめているのは，単に学際的な組織をめざしたからではない。科学が＜沈黙をまもる＞自明の前提を省察し，何のための学問かを問いただすことによって人間の問題の真の意味をまず回復させようと志向するからである。

紀要の創刊に際し，ミネルヴァの梟の翼は人間英知の黄昏にも力強く羽ばたくことを希って，江湖諸賢の御清鑑を仰ぎたい。

昭和50年3月

人間科学部長
前　田　嘉　明